

『みんなの日本語』の物語

—国・人物の関係から見える世界観—

山本 冴里 (Université Charles-de-Gaulle-Lille 3)

yamamoto.saeri@gmail.com

1. 問題の設定

日本語の教科書にはたいてい複数の登場人物がいて、彼らの関わる場面が時系列的に並んでいる。つまりそこには物語があるのだが、国語あるいは第二言語、外国語としての様々な日本語教科書を読んでいると、その物語に透けて見える価値観があることに気づく。戦時中や社会体制が大きく異なる地域で出版されたものであれば、その価値観に違和感を持つことも多い。前者の例を1942年出版の『まんしゅう2』から、後者の例を現在中国で多く使われている『新編日語4』から挙げる。

つめたい朝風 美しい東の空 ラップがひびきわたります
こほった雪のひろばに かいたくちの人たちがげんきよくあつまります
日の丸のはたをあげ、きゅうじょうをえいはいして 「君が代」をうたいます
「すめらみこと、いやさか、いやさか、いやさか」とこゑをそろえてとなへます

(『まんしゅう2』)

今日の中日友好協力のあらゆる成果は、いずれも両国人民のたゆまない努力のたまものにはほかならない。「世々代々友好的につきあっていこう」という遠い目標を持ち、二十一世紀に目を向けて努力しさえすれば、中日友好協力事業は必ずますます発展するものであろう。

(『新編日語4』)

しかし、現在日本で出版されている第二言語、外国語としての日本語の教科書を見る限りでは、本稿筆者はその価値観に不自然さを感じたことはないし、他の教師からそのような話を聞いたこともない。理由としては二つの可能性が考えられる。一つは、それらの教科書が価値中立的であるからという解釈であり、もう一つは本稿筆者を含む多くの母語話者日本語教師がそのような価値観を内面化しているからという解釈であるが、より有意義な分析に結びつくのが後者であることは言を待たない。本研究は後の一連の研究に続くパイロットスタディーとして、恐らくは現在最も一般的な日本語初級教科書である『みんなの日本語 初級Ⅰ』『みんなの日本語 初級Ⅱ』(スリーエーネットワーク)を分析対象とし、登場国名・人物の関係を切り口とした分析を通して、同書における価値構造を探ることを目的とする。

2. 『みんなの日本語』登場国名と回数、意味づけ

本項では、『みんなの日本語 初級Ⅰ』および『みんなの日本語 初級Ⅱ』(以下『みんなの日本語』)における登場国とそれぞれの登場回数を提示する。並びに、幾つかの例を挙げて、その国々が、それ

それぞれある程度固定的な意味づけをされていることを示す。

まず、本稿における分析対象抽出と登場回数判定基準について記述する。分析対象抽出および登場回数判定においては、以下 1) ～4) の基準を設けた。

1) ページ単位の分析対象は、『みんなの日本語』の以下を除くすべてのページとした。

まえがき・凡例・「学習者のみなさんへ」と題されたページ・目次・索引・奥付・奥付裏の「初級日本語教材の定番 みんなの日本語シリーズ」案内・表表紙と裏表紙の裏側にある見開きページ（地図や年表など）

2) 記述回数自体は 1 回でも、学習者が読んだり発声したりする回数が複数回あると思われるものは、複数回の回数として判定した。たとえば、下例においては、アメリカを 3 回、フランスを 3 回と判定した。これは、フランスという言葉は 1 度しか書かれていないものの、「ワットさんはフランス人ですか」「いいえ、フランス人じゃありません」という答が想定されているためである。

例（第 1 課 練習 B4, p.9）

例：ミラーさん・アメリカ人 → ミラーさんはアメリカ人ですか。
……はい、アメリカ人です。
2) ワットさん・フランス人 →

3) 挿絵中で、国旗などにより国名が特定できる場合も、回数判定に加えた。

4) ホンコンは、正確には国名とはいえないが、中国・イギリスの両者から独立した回数判定対象とした。イギリスから中国にホンコン行政権が移行したのが 1997 年 7 月 1 日であり、『みんなの日本語』出版は翌 1998 年 3 月である。『みんなの日本語』の前書きには、「3 か年以上の年月をかけて企画・編集した」とあることから、出版準備段階のほとんどでは、ホンコンは中国の内部とは見做されていなかったと考えられるからである。その傍証として、『みんなの日本語』ではホンコンが漢字表記でなく片仮名表記になっていることを挙げる。また、地理的位置から、イギリスの内部と見做されていたというようにも考えにくい。

以上 1) ～4) の基準を設けて回数を判定した結果、『みんなの日本語』に登場する国名は 24 か国であり、総登場回数は 467 回であった。次頁表 1 にその全国名と登場回数を挙げ、図 1 に登場回数が 10 回以上ある国々を回数順にグラフ化したものを示す。ただし、日本語の教科書であるので「日本」という語が特別な位置づけとなるのは当然であることから、「日本」は図 1 の提示対象からは外した。

図 1 に明らかであるように、日本を除く国名登場回数としては「アメリカ」が圧倒的に多く、次点「中国」の 3 倍以上登場している。また、「イタリア」「ドイツ」「フランス」「イギリス」といったヨーロッパの国々が多く上位に位置しているということがわかる。次頁図 2 は、表 1『みんなの日本語』登場の全国名と登場回数の情報に、「アジア」「ヨーロッパ」「アフリカ」「西洋」という、より広範囲を示す地域名登場回数を加え、「欧米」「アジア」「中南米」「オセアニア」「アフリカ・中東」という区分をもって、グラフ化したものである。「欧米」をまとめた理由は、後述するように、『みんなの日本

語』では、ヨーロッパ諸国とアメリカ合州国が、よく似た意味づけをされているからである。

表1：『みんなの日本語』登場の全国名と登場回数

国名	回数	国名	回数	国名	回数
日本	197	インド	11	サウジアラビア	2
アメリカ	81	インドネシア	11	ホンコン	2
中国	25	タイ	9	ベトナム	2
イタリア	23	オーストラリア	8	イラン	1
ドイツ	21	韓国	7	シンガポール	1
フランス	17	メキシコ	7	ポーランド	1
ブラジル	16	スイス	6	ロシア	1
イギリス	13	スペイン	4	ドミニカ	1

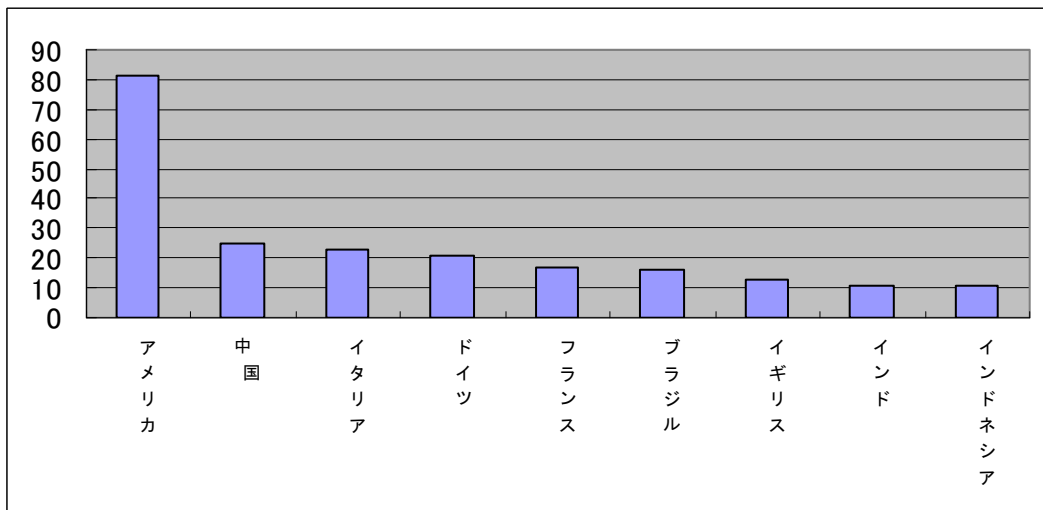


図1：10回以上提出されている国名（「日本」を除く）

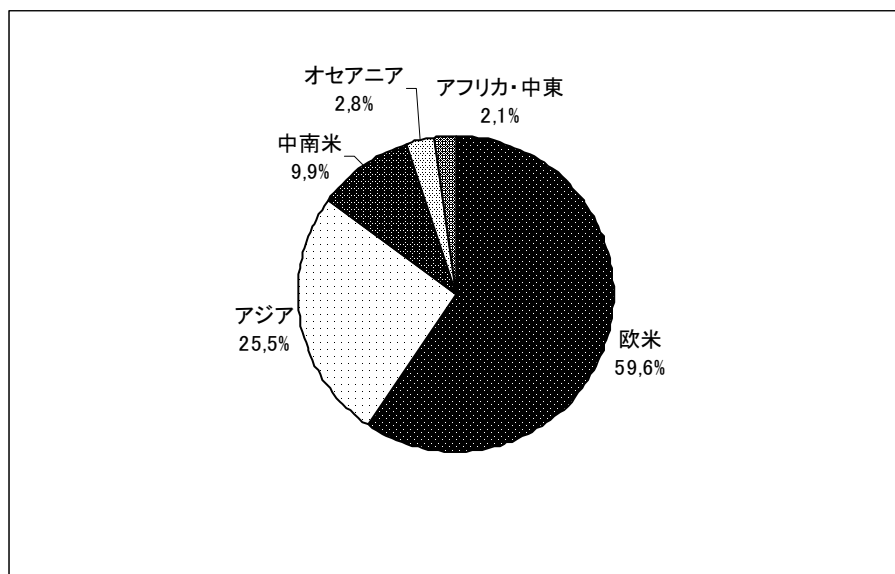


図2：広域地域ごとの提出割合

さて、このような国名・広域地域名提出回数の偏りがどのような意味を持っているのかを知るためには、比較する対象が必要である。本稿では、比較対象として、海外における日本語学習者数を選んだ。図3は、『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－（概要）』（国際交流基金）より、海外の日本語学習者数上位10か国を表したグラフである。図4は、図2と同一の区分をもって広域地域ごとの日本語学習者数の割合を示したものである。

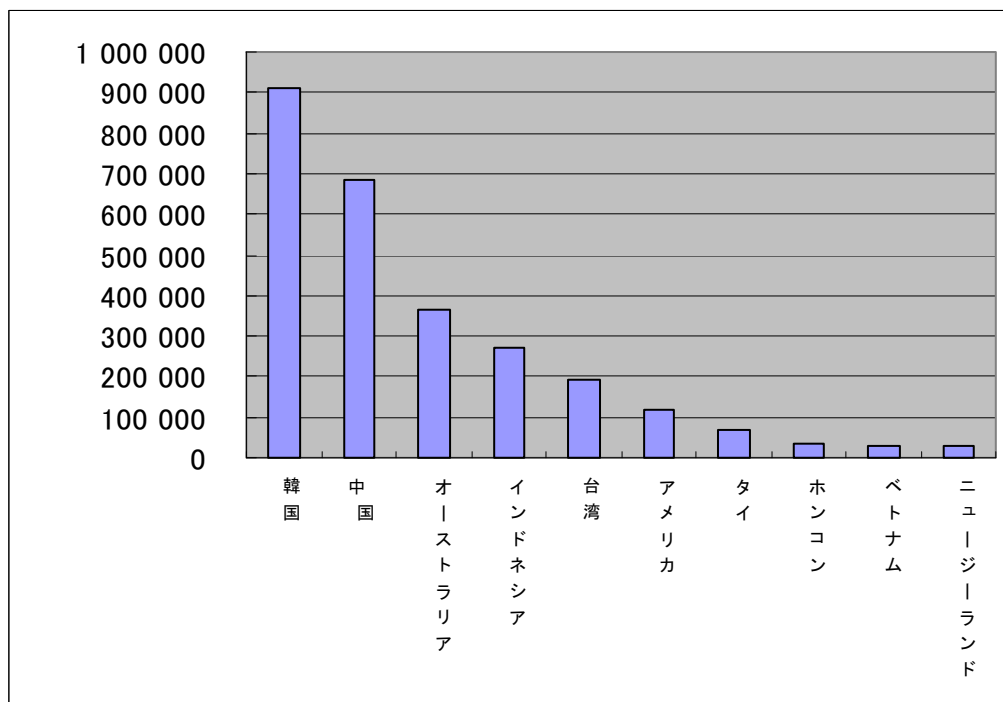


図3：海外の日本語学習者数上位10か国

(『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－』（国際交流基金）より山本が作成)

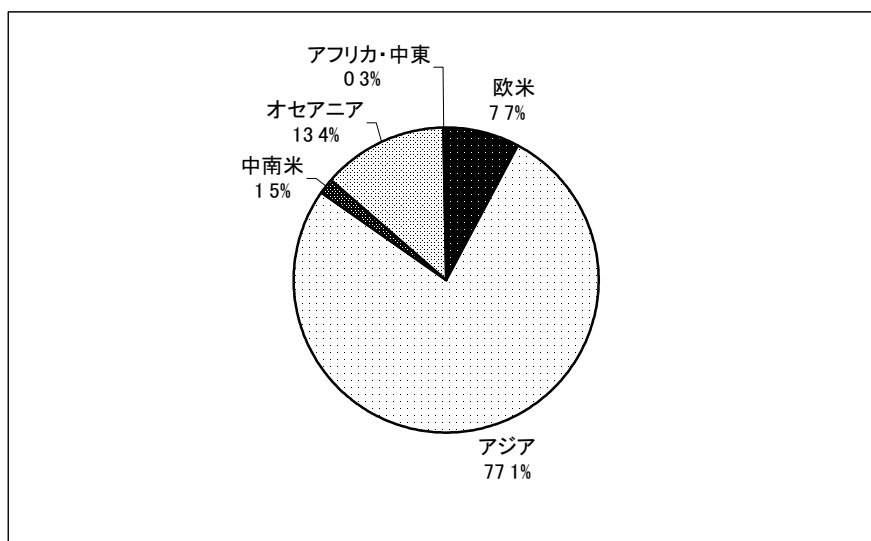


図4：広域地域ごとの日本語学習者数の割合

(『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－』（国際交流基金）より山本が作成)

図2と図4の比較から明らかであるように、海外における日本語学習者数はアジアが約77,1パーセントと圧倒的に多く欧米が7,7パーセントと少ないのに対して、『みんなの日本語』では反対に欧米が約59,6パーセントの過半数を占め、アジアは25,5パーセントに過ぎない。次に、国ごとの意味づけを見ていくが、紙幅の関係上すべての国についての分析を載せることはできないので、例として登場回数に近接しているフランス(6位・17回)とブラジル(7位・16回)の意味づけを比較する。意味づけを析出するにあたっては、以下1)~3)の手法をとった。

- 1) 国名が入っているのと同じ文に使われている名詞(人名など固有名詞・人称代名詞・疑問詞を除く)をすべて抽出し、回数を数えた。複数回(2回以上)あったものを関連名詞とした。
- 2) 同様にして、関連動詞を抽出した。
- 3) 同様にして、関連形容詞を抽出した。

下表2にフランスの場合における関連名詞・関連動詞・関連形容詞を、下表3にはブラジルの場合における関連名詞・関連動詞を示す。なお、ブラジルの場合には、関連形容詞は見られなかった。

表2: フランスの関連名詞・動詞・形容詞

関連名詞	回数	関連動詞	回数
ワイン	5	行く	5
料理	3	勉強する	3
映画	2	習う	2
学校	2	関連形容詞	回数
フランス語	3	おいしい	2
パン	2	/	
フランス人	2		

表3: ブラジルの関連名詞・動詞

関連名詞	回数	関連動詞	回数
ブラジル人	4	勝つ	3
試合	3	負ける	2
サッカー	2	来る	2
コーヒー	2	/	

関連名詞および関連形容詞の内容から、フランスの関わる話題は、飲食物(「料理」「ワイン」「パン」「おいしい)が多いということがわかる。フランス「映画」は、文ばかりではなく挿絵にも登場していて、第18課練習C2, (p151)では、金髪であると思われる女性が *Je t'aime...Je t'aime...* と繰り返している。なお、『みんなの日本語』が白黒印刷であるにもかかわらずこの女性が金髪であると推定される理由は、『みんなの日本語』挿絵では、黒髪の場合は、髪が黒く塗りつぶされるからである。

一方、ブラジルの関わる話題は、サッカーに特徴づけられる。2回登場の「サッカー」に加え、3回出てくる「試合」も、すべてサッカーの試合を意味している。サッカーはブラジル・日本両国の国旗とともに、挿絵にも登場する。(第21課 会話, p173)したがって両国の関連名詞に共通して挙げられるのは、ステレオタイプ的な要素が非常に強いということである。しかしながら、ここには共通点ばかりでなく相違点もあり、それは、フランスの場合は「フランス人」が表2の関連名詞登場総数19回中2回(約10.5パーセント)に過ぎないのに対して、ブラジルの場合は、「ブラジル人」が表3の関連名詞登場総数11回中4回を占める(約36.4パーセント)ということである。

また、「フランス語」は「フランス」の関連名詞に入るが、「ポルトガル語」或いは「ブラジル語」

は、「ブラジル」の関連名詞には入らない。従ってフランスの場合、「フランス」－「フランス人」－「フランス語」という繋がりが強いが、ブラジルの場合は、「ブラジル」－「ブラジル人」という連関のみで、「ポルトガル語」あるいは「ブラジル語」との結びつきは見られない。ただし、「ブラジル」－「ブラジル人」の結びつきは、「フランス」－「フランス人」の結びつきよりも強い。

次に、関連動詞の比較を行う。フランスの関連動詞は「行く」「勉強する」「習う」であり、ブラジルの関連動詞は「来る」「勝つ」「負ける」「来る」である。フランスの関連動詞が、フランスに向かう・フランス関連のものを学ぶという事柄を意味するものであるのに対して、ブラジルの関連動詞は、反対の方向性でブラジルから来るというもの、あるいは勝つ・負けるという並列的なものとなっている。これを図5および図6に示す。なお、図中の動詞を囲った円の大きさは、ほぼ登場回数に対応している。

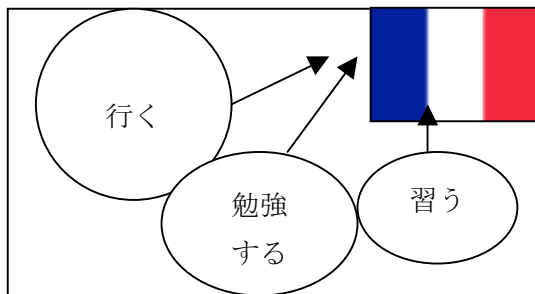


図5:「フランス」の関連動詞

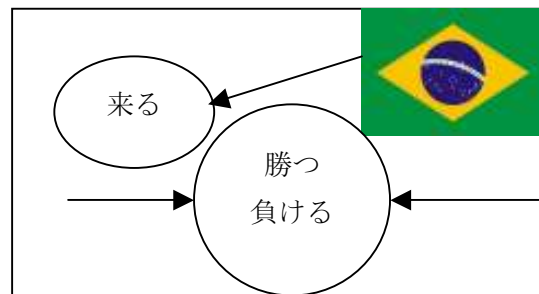


図6:「ブラジル」の関連動詞

3. 登場人物と回数, 意味づけ

本項では、『みんなの日本語』の登場人物について検討する。『みんなの日本語』には、大江健三郎など実在する著名な人物の名前を除き、44人の登場人物がいる。そして、その全員の国籍が推定できる。主要な登場人物については、国籍情報が明記してある上に、脇役で国籍情報の明記がない場合にも、「小林さん」「パクさん」「(アメリカで働いている) ホワイトさん」というように、典型的な名前が使われており、日本の公教育を受けた者にとって国籍想定が難しい名前は見られない。図7は、全登場人物のうち日本国籍を持たないと推定できる人物を、登場回数順に第10位まで並べたものである。

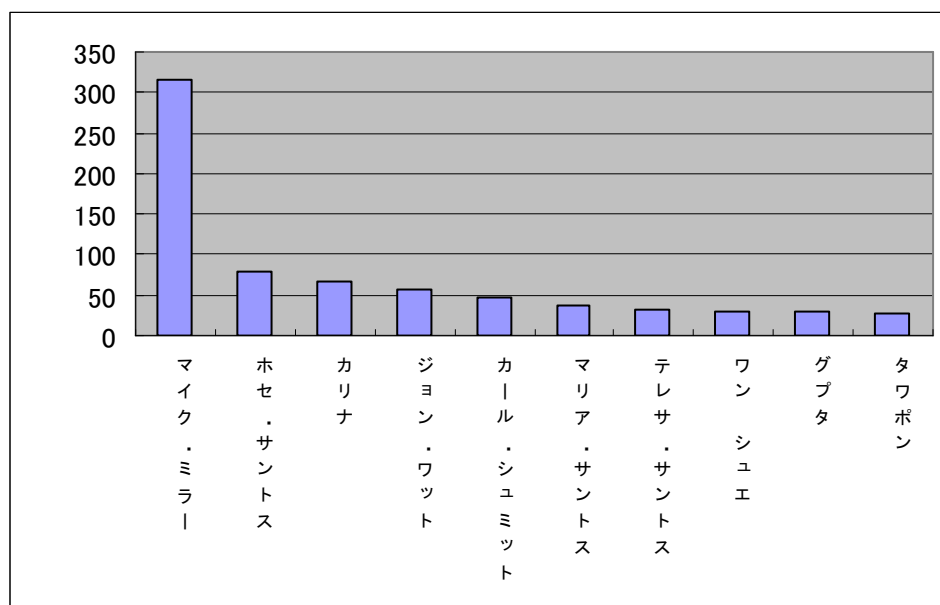


図7:『みんなの日本語』日本国籍外登場人物 登場回数順上位10名

図7から明らかであるのは、第一位マイク・ミラーの登場回数が圧倒的に多く、次点のホセ・サントスの約4倍となっているということである。従って、このマイク・ミラーは『みんなの日本語』の物語において、非常な重要性を持っていると考えられる。では、彼はいかなる人物なのか。表4に、『みんなの日本語』各所から得られた、マイク・ミラー（図8）の客観的情報を記す。

表4：マイク・ミラーの客観的情報

年齢	28歳
既婚・未婚の別	未婚
誕生日	10月6日
仕事	IMC（コンピューター会社）の社員
住所	大阪（初級Ⅰ）→東京（初級Ⅱ）
国籍	アメリカ
家族	両親（「ニューヨークの近く」に在住） 姉（ロンドン在住）



図8：マイク・ミラー

次に、表5にマイク・ミラーに対する他者評価を、言い換えれば主観的・相対的情報を記す。

表5：マイク・ミラーに対する他者評価

主観的・相対的情報	情報入手箇所
ミラーさんは わかくて、元気です。	第16課 練習A4
ミラーさんは 頭がよくて、おもしろいです。	第16課 練習A4
ミラーさんは ハンサムで、親切です。	第16課 練習A4
ミラーさんは 背が高くて、すてきな人です。	第16課 練習B6

次に、表6にマイク・ミラーに関する推定補足情報とその根拠を記す。

表6：マイク・ミラーに関する補足情報

推定補足情報	補足情報の根拠	根拠情報入手箇所
両親と仲が良い	料理を習う・プレゼントやビデオを送る	第6課 問題2ほか
優秀である	スピーチコンテストで優勝・テーブルは手作り	第50課 会話ほか
努力家である	土曜日の朝は図書館で勉強する	第6課 問題6
仕事ができる	東京へ栄転・出張が多い	第25課 会話ほか
女性にもてる	お花見や映画、テニスに誘ったり誘われたりする	第6課 会話ほか
旅行が好きである	旅行の本を読む・メキシコへ旅行する	第26課 問題1ほか
日本を知ろうと努力している／日本に好感を持っている	お花見や祇園祭に行く てんぷら定食を注文する 首相の名前を知っている	第12課 会話 第13課 会話 第50課 問題1ほか

図7に明らかであるように、マイク・ミラーは、圧倒的に登場回数が多い。そして表5および6に見られるような肯定的な記述が多く、そうでなくとも中立的な記述がされており、否定的な記述は全く見当たらない。その登場回数の多さと肯定的記述の多さによって、『みんなの日本語』は、「素晴らしきマイク・ミラーと仲間たち」といった様相を呈している。第25課の会話に、皆がマイク・ミラーの東京への栄転を祝う場面があるが、この会話の挿絵（第25課会話, p207）にあるようにマイク・ミラーは皆の中心にあり、皆に好かれている存在であると考えられる。¹ そのうえ、マイク・ミラーは日本に好感を持ち、日本を知ろうと努力している存在として描かれている。（表6下段）

もっとも、初級の第二言語、外国語教科書において、全般的に穏やかで物事に好意的な記述方法を採ることは当然かもしれない。しかし、そのような『みんなの日本語』においても、登場人物のすべてが、マイク・ミラーほど好意的に描かれているわけではない。登場回数第9位に、グプタという人物がいる。表7に、『みんなの日本語』各所から得られた、グプタ（図9）の客観的情報を記す。

表7：グプタの客観的情報

年齢	42歳
既婚・未婚の別	不明
誕生日	不明
仕事	IMC（コンピューター会社）の社員
住所	不明
国籍	インド
家族	インド在住



図9：グプタ

グプタに関する情報はマイク・ミラーに関する情報よりも量が少ないが、これは登場回数の差（マイク・ミラー315回、グプタ29回）を考えれば、当然である。では、描かれ方はどうか。グプタの場合は、直接的に他者から評価されている場面（マイク・ミラーの表5に対応）は見当たらないのだが、彼の描かれ方には、折に、マイク・ミラーの場合とは異なる特徴が見られる。以下に、グプタの名前が出ている3つのやりとりを示す。

第28課 問題3

A：あの人だれ？

B：どの人？

A：あそこでテレビを見ながらごはん食べている人。

B：ああ、グプタさんだよ。インドから来たんだ。

第45課 練習B7

A：グプタさんはパーティーに来ましたか。

B：いいえ、インド料理を用意しておいたのに来ませんでした。

¹ 東京への転勤を栄転と判断した根拠は、他の登場人物からの「転勤、おめでとうございます」という言葉があるからである。

第 47 課 問題 2

A : グプタさんが会社をやめるそうですよ。

B : え? ほんとうですか。どうして?

A : アメリカのコンピューターの会社へ行くそうです。給料もいいそうですよ。

グプタの登場回数は 29 回であるが、肯定的な描かれ方をしている箇所は一箇所もない。グプタは、マイク・ミラーのように、やさしい・元気・面白いなどといった評価をされることはない。たいていは中立的な記述であるが、中には上記 3 例の下線部のように、否定的な含意を感じさせる記述もある。

さらに特徴的であるのは、グプタの場合、名前を呼ばれているグプタ本人は、多くの場合その場には居合わせないということである。上記のどの例においても、グプタ本人は会話をしている A でも B でもない。登場総数 29 回のうち、グプタ本人がその場において会話をする例は、3 例しか見当たらない。グプタ不在の場所で、グプタに関する中立的あるいはやや否定的なやりとりが交わされている。

4. 不在という問題

前項末に述べた、グプタ不在の場所でグプタに関するやりとりが進められるという問題は、登場人物のみが陥っている状況ではなく、国名・地域名においても、不在のうちに語られ、領有されている箇所があった。たとえば、アフリカという広域地域名は、『みんなの日本語』には 4 回登場するのだが、その中で、アフリカに実際に関わった経験があると見做される人の発言は一つもない。表 8 および図 10 において明らかであるように、アフリカは自然や動物のみに結びつけられており、そこには、その場所で生きている人間に関する事柄が、全く入っていない。

表 8 : アフリカに関する記述

アフリカに関する記述	情報入手箇所
機会があれば、アフリカに行きたいです。	第 35 課 練習 B1
わたしは動物が好きで、子どものころからアフリカへ行くのが夢でした。	第 50 課 会話
じゃ、アフリカへ行かれますか。	第 50 課 会話
アフリカの自然の中できりんや象を見たいと思います。	第 50 課 会話



図 10 : 第 50 課 会話, p203

5. 『みんなの日本語』の世界観

最後に、『みんなの日本語』の世界観についてまとめる。分析結果から、『みんなの日本語』の世界観を、図 11 のように表した。「勉強」したり「習」ったり「行く」対象として、欧米世界がある。その欧米世界を代表するマイク・ミラーは、非常に肯定的に描かれており、日本に対しても、好意的で暖かい目を注ぐという存在である。アジア各国やブラジルは、欧米に比して影が薄くはあるものの、複数の文脈で登場している。不在のうちに語られる存在として、アフリカがある。そしてロシアや東欧、中東、中央アジアは、ほとんど語られさえもしない。²

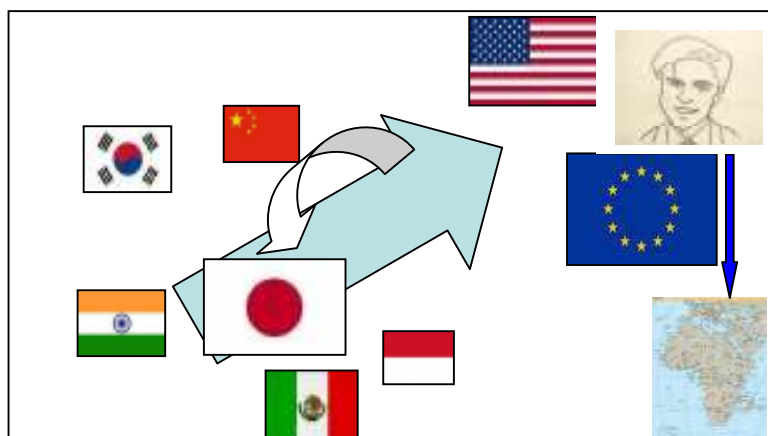


図 11 : 『みんなの日本語』の世界観

6. 今後の課題

本稿では、『みんなの日本語』の登場国名・人物の関係を切り口とした分析を通して、同書における価値構造を探った。今後は、他の日本語教科書を同様に分析し、その後、その結果を公立中学校英語教科書や、他国の他言語の初級教科書と比較したい。また、その際、特に不在・領有の問題に注目して分析していきたいと考える。

引用資料

『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006年－（概要）』（2008）国際交流基金。

『新編日語4』（1998）上海外語教育出版社。

『まんしう2』（1942）関東局在満教務部教科書編輯部。

『みんなの日本語 初級Ⅰ』（1998）スリーエーネットワーク。

『みんなの日本語 初級Ⅱ』（1998）スリーエーネットワーク。

² 本稿執筆中の2008年9月24日に麻生太郎が日本の第92代首相となり同年9月29日に所信表明演説が行われた。同演説において外交関係について述べた箇所は、次のように始まっている。「外交について、わたしが原則とするところを、申し述べます。日米同盟の強化。これが常に、第一であります。以下、順序を付けにくいのをお断りした上で、隣国である中国・韓国やロシアをはじめアジア・太平洋の諸国と共に地域の安定と繁栄を築き、共に伸びていく。これが、第二です」この発言は、本稿の分析結果と呼応するところがあるのではないか。